

No.43 ホセイン・ヴァラマネシュ

Hossein Valamanesh

「きみはただここにすわっていて。
ぼくが見張っていてあげるから」

北川フラムさんのコラム / 1997 (平成9) 年 10月1日付 立川市市報記事より

道路に置かれた椅子とスリッパと石の上の本。これらは皆、作者であるヴァラマネシュがオーストラリアで日常使っている者で、ブロンズで作られている。そのうえ丁寧に、道路に作者の影までが刷り込まれている。工事中に清掃の人が置き去りにされたこの椅子を運ぼうとして動かせなかったという笑い話もある。

2つの小さな石の車止めのかわりに、オーストラリアの日常を、日本の立川という都市にもってきたというこの作品は、あまりにも超現実であり、それがこの作品の魅力になっている。機能をアート化（物語化）するというファーレ立川の考え方を見事に体現したものだといえるだろう。

作家のメッセージ / 日本住宅公団（現：UR都市機構）「ミニ通信」より

私がファーレ立川プロジェクトに関わったのは、綿密に考え抜いてそうしたいと願ったというよりは、偶然の一致によるものでした。参加を要請されたのは名誉なことだと感じています。私はこれまでも公共空間の為の作品を数多く作ってきましたが、常に委員会に向かって私のアイデアを納得してもらうよう努めなければなりませんでした。

ですから提案を任せ、アートフロントギャラリーにより制作を依頼されたと知った時は、喜ぶと同時に驚きました。

作品の設置場所や大きさについて説明はありましたが、コンセプトについては、まったく制限はありませんでした。魅力ある生活環境をうみだす、という本プロジェクトの全体の方針も私の考え方にあっていました。

私はパーソナルであると同時に、視覚的、物質的相互作用素である椅子、靴、影、本は私の視覚言語の一部です。この場合これらの要素は一緒になって視覚による一編の詩をうみだします。ひとつひとつの要素は私の生活や考えをほのめかしています。

椅子は長年私のスタジオにあるものですし、靴はイランから持ってきたものです。

それらは旅、移住、記憶、未来の夢について語っています。

そして傍らには読むことのできない閉じた本、足元の私の影と共に靴の中に私がいるかのよう、私の一部は常に作品と共にあり、道を見つめ、見る者に話しかけます。

“あなたはただここに座っていなさい。私が見張っていてあげますから”と。